



在りし日を偲びヴァイオリニスト池田敏美さん

追悼コンサート

2025.10.5



「音の風」を途切れることなく吹かせ続けたい

敏美先生とは、周囲のスタッフほど深く色濃い思い出もなく、絆コーラス隊の「音の風コンサート」で演奏をしに来るヴァイオリンの先生、かなりの認識でした。コンサートで上映された先生の軌跡の映像で、弦さんの思いを受け継ぎ音の風の活動を続けてこられ、当町を第2の故郷のように慕っていられた事を知り、もっと積極的に話ししていればよかったな、と後悔ばかりが募ります。

コンサートスタッフとしては舞台係としてリハーサルから演者の皆さんとお話しをする機会を頂き、追悼の気持ちを込めて、敏美先生に叱られないような演奏を披露しようと気合が入っているのをひしひしと感じました。自分自身も絆コーラス隊としての出演があり、スタッフと演者の切り替えはなかなか難しい所ではありましたが、円滑なコンサート進行の一助になれていたのなら幸いです。

今後も、先生の遺志を受け継ぎ、当町で「音の風」を途切れることなく吹かせ続けたいです。所縁のある方々をお招きし、今までと変わらず、空の上まで「音の風」を届けられるように邁進していきたいと、強く感じました。

桂木千秋（舞台係担当・最上町向町在住）

ヴァイオリニスト池田敏美さんの歩んだ道 ⑤

「池田敏美さんとやまなみ」
2008年6月にNPO法人やまなみを設立し、その2年後の2010年10月に認知症高齢者の介護施設「グループホームやまなみ」を開設した。
やまなみと池田敏美さんの関係は、法人設立総会後の懇親会でのオープニング演奏から始まり、その年の9月、やまなみの会報に「歩んできた道程と音楽」と題して、生まれ故郷の北海道旭川から東京の音大入学、26歳の時、新星日本交響楽団の設立、そして定年後、最上町に移り住み、今までのコンサートホール中心の演奏活動から、福祉施設、学校・病院・お寺の本堂等々、多彩な演奏活動に移ってゆく道程を寄稿してもらった。
グループホーム開設以降、施設で「ひなまつりコンサート」「七夕コンサート」「クリスマスコンサート」と年3回のコンサートを行ってきた。コロナ禍で休止になるまで約10年続けた。年3回のホームコンサートには、隣県宮城県鳴子温泉のグループホーム「ふかふかはうす」にも呼びかけ、ピアノ東海林豊さん、ヴァイオリン池田敏美さん、地元合唱団「絆」、ギターサークル等が参加し、い



つも狭いリビングが60人程で埋まった。
2016年7月に息子の弦さんを亡くした。私たちは追悼コンサートで敏美さんを励ました。その年の11月、やまなみ主催で「音の風コンサート」を開催し、町の交流会館をいっぱいにした。演奏したのは20数曲、円熟した清らかで澄んだ音、人生に染み入る哀愁と切なさ、生活感を持ったヴァイオリンの音色をたつぷりと聴かせてもらったのを思い出す。
池田さんは、2018年5月から2022年5月まで4年間NPO法人やまなみの理事を務められた。NPO活動に精力的に参加され、福祉や認知症介護の勉強会への参加、グループホームの運営にも携わった。
池田敏美さんの生き方を見ると、80年の人生で何回も不幸や困難を乗り越え、不死鳥のように生きた人だったように思う。（NPO法人やまなみ理事長 大場武男）

シリーズ 「人口減少時代を生きる」

④

『空き家の急増』

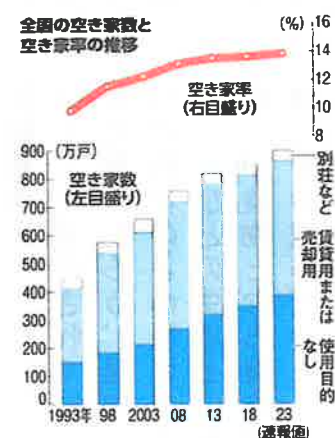
空き家、最多900万戸

「空き家（08）をゼロに（02）」と読む語呂合わせから、8月2日が「空き家ゼロの日」の記念日になったという。

空き家は1993年から30年で2倍に増えた。毎年人口減と高齢化で増加し、今や900万戸、総住宅に占める空き家の割合は13.8%になり、住宅7戸に1戸が空き家の計算だ。一人暮らしの高齢者が亡くなった後、施設に入所することで増えているという。

人口減と高齢化で増加

朝日新聞の報道によると、人口に占める65歳以上の割合が50%以上の市町村の空き家率は32.7%となる一方、60歳以上の割合が低い自治体ほど空き家率も低く、特に65歳以上の単身世帯の割合が高い自治体は空き家率も高いという。また5年間の人口の減少率が高い自治体ほど空き家率が高く、高齢化の人口減少が空き家の増加につながっている。



大工さんの数、40年で3分の1に家を建てる「大工さんが見つからない」。国勢調査によれば「大工就業数」は1980年の93万人をピークに減り続け、2020年には30万人を割り、35年にはさらに15万人まで減るといわれる。
最近の住宅建築の傾向は、注文住宅は「ぜいたく品」となり、築数10年程度しかもたないような戸建ての安価な工場生産の注文ハウスが主流になっている。技術を持った大工さんが不足すれば耐震補強などの必要なりホームも滞るようになるのではと懸念されている。大工さんを送り出してきた職業訓練校や工業高校が減少し、待遇改善が進まないことで、若い世代が大工を敬遠、高齢化が進んでいる。

祖先の心を伝える碑 (三十四)

次は野頭の湯殿山碑。県道沿いにある地藏堂の脇に、本



法田下の湯殿山碑

今号では、まず最上町内西地区（旧西小国村域）にある三基の湯殿山碑を紹介する。一基目は法田下の湯殿山碑で、地元では「あらまち」という区域の県道端に立っている。自然石を加工した碑高二〇二cm、最大幅約一〇〇cm、奥行四一cmほどのどっしりとした佇まいの巨碑。左側面の刻字で、建立は二二〇年前、江戸時代後期の文化二年（一八〇五）四月八日と判る。これまで筆者が建立年を確認した湯殿山碑では町内最古の碑。碑面には、「湯殿山」の三文字が篆書体（しんしゅ）と思しき書体で、大きく深く彫られている。

三基目は若宮の湯殿山碑で、太郎田観音堂西側の諏訪神社境内にある。この碑は山際の一角に小振りの庚申塔や馬頭観世音碑などと並び、ひときわ高く立っている。碑高二〇五cm、最大幅六七・五cm、奥行約四〇cmの碑。碑面いっば



野頭の湯殿山碑

連載の60回で紹介した古峰神社碑や二基の馬頭観世音碑と並んで立っている。碑高一二〇cm、最大幅約五〇cm、奥行二六cmの自然石の碑。古峰神社碑建立発起人の一人だった後藤利八が発起者になり、明治三年（一九〇〇）九月八日に野頭の「村中」（村全体の合意と協力）で建立した碑である。彫りは深くないが、「湯殿山」の文字は草書体の流麗な筆致の見事な彫り。

豊作を願った巨碑の建立
前号と今号で計六基の湯殿山碑を紹介してきた。そのほとんどが碑高二m超えの巨碑。そうした巨大な湯殿山碑の建立はかつて当町だけではなく、新庄・最上地域全般で行われたのであった。
ではなぜ私達の祖先は、碑の運搬や建立に前号に記した驚くほどに多大の労力を費やし、巨大な湯殿山碑を建立したのだろうか。それは第一に、



若宮の湯殿山碑

いに篆書体風の「湯殿山」の三文字が彫られている。軟質の石で風化が激しく他に刻字は確認できないが、「湯殿山」の書体や文字の大きさを推察では、法田下の碑とはそう年代の違わない江戸後期の建立なのかもしれない。

出羽三山信仰に關係する碑(下)

湯殿山碑②

伊藤 和美（最上町若宮在住）

出羽三山のなかでも湯殿山が五穀豊穡をもたらす神が宿る山として信仰されてきたからであつたらう、歴史上、いつの時代のどの地域であつても、人びとの生活上の最大の願いが食物となる農作物の確保、その豊作だったことに変わりはない。私達の祖先も農作物とくに米の豊作を願い、どの村でも村人がこぞって協力し合い、巨大な湯殿山碑を建立したに違いない。新庄市域には五穀豊穡を願い、湯殿山碑は巨石を使い、「湯殿山」の三文字は多くの米が入るような大きな文字にし深く掘って造るべきだ、との伝えがあつたという。当町ではそのような伝えのあつたことをまだ確認できていないが、当町に現存する碑高二m超えの湯殿山碑そのものが、当町でも湯殿山碑のほとんどはそうした考えに基づいて建立されたというのを物語っている。各集落の湯殿山の巨碑には、農作物の豊作を願った祖先の強い思いが込められている。

開所15年に

グループホームやまなみ 利用案内

ご利用いただける方

(定員9人)

■要介護者で、認知症と診断されている方 ■少人数で共同生活を営むことができる方 ■医療機関で、常時の治療の必要のない方

グループホーム 利用料

室料（居住費）	1ヶ月	40,000円
食材費（1日1,100円）	1ヶ月	33,000円
管理費	1ヶ月	20,000円

介護保険料（2割負担の方は倍）

要介護1（1日）765円	1ヶ月（30日）	22,950円
2		24,030円
3		24,720円
4		25,230円
5		25,770円

その他、医療連携加算や介護職員処遇改善加算等が加わり、月の利用料は、おおむね、要介護1が121,555円、要介護2が122,827円、要介護3が123,640円、要介護4が124,241円、要介護5が124,877円になります。

理美容代、紙オムツ等、個人で使用する日常生活用品は実費をいただきます。

共用型認知症サービス 利用料

利用時間 午前9時～午後4時
(8:30にお迎え、16:00にお送り)

食材費 昼食 400円	
介護保険料	要介護1（1日）523円
	2 542円
	3 560円
	4 578円
	5 598円



その他、入浴介助1日50円、介護職員処遇改善加算等が加わり、週3回の利用の場合で、おおむね、要介護1が12,956円、要介護2が13,224円、要介護3が13,476円、要介護4が13,732円、要介護5が14,012円。

会報「やまなみ」新聞折込み終了のお知らせ

2008年6月のNPO法人やまなみ設立以来、隔月発行してきた「会報「やまなみ」」が危機にひんしています。3,000部印刷し、手配り700部、郵送120部、新聞折込み2,100部を17年間続けてきましたが、財政的な困難から新聞折込みをやめざるを得なくなりました。長きに渡り愛読され、ご意見、ご感想もいただき、町民にしっかり定着していたNPOやまなみの会報でしたが、今後年4回、再び手作りで発行します。

今まで新聞折込みで愛読されていた方には手配りでお届けしますので、希望する方はやまなみ事務所に申し込んで下さい。（今までも新庄市を含め町内地区ごとに15人で配布しています。）

なお、長年の愛読者でやまなみの会員になっていない方にはこれを機会に会員になっていただければ幸いです。（現在会員数160人、県内のNPOで最大会員数）

年会費 1,200円
NPO法人やまなみ理事会
会報「やまなみ」編集委員会

<申込先> やまなみ事務所 0233-43-4567